

交通安全加護の

桑園延命地藏尊

踏み切り事故が後を絶たないため建立された桑園延命地藏尊を紹介します。

明治二年（一八六九年）七月、北海道開拓使が設置され、幌加内炭鉱の開発と石炭の輸送を目的とした鉄道建設が始まり、十三年（一八八〇年）十一月に小樽の手宮く札幌間が開通し、桑園地区を横切るようになりました。当時は、ヨシや大木が密生し、その中をカーブしながら線路が敷かれていました。このため、非常に見通しが悪く、北七西一一の踏み切りでは、鉄道死亡事故が頻繁にあり「魔の踏み切り」と呼ばれるようになりました。

大正十五年（一九二六年）、死者の慰霊と魔よけのための地藏尊を建てることを目的とし、地域住民で組織された北門倶楽部がつくられました。同倶楽部では、手始めに関東地方の地藏尊について調査しました。その結果、大型のものでも一・七メートル、通常はそれ以下の小型石仏像が多いことが分かりまし

た。そこで、日本一巨大な石仏像を制作することに決まりました。

制作は、札

幌で天才的な石工師と言われていた阿部あべ独海どかいに依頼し、昭和二年

八月、北六西一一に全長二・六メートル、重さ三・五トもある桑園延命地藏尊を無事に建立することができました。

地藏尊の加護があつたのか次第に事故が少なくなり、六十三年十一月、開通百八年目にして鉄道が高架化され、鉄道事故の問題もようやく解消されました。鉄道が高架化された今でも、毎年七月二十四日には、地藏尊への感謝と死者の供養のために慰霊法要が行われています。



慰霊法要の様子（平成15年撮影）

（平成十五年十月号 第九十二回）